# 「サンタはいるか」(小学校2年生)

A小学校の2年生のP4Cの授業「サンタはいるか」を参観しました。このクラスでのP4Cの授業は4回目ということでしたが、子どもたちは授業には大変慣れている感じで、机を移動し、椅子を円にして並べるのも、どうすべきか考えながら実行していました。テーマがサンタということで、子どもたちは非常に活発に手を挙げて、議論をしており、授業を楽しんでいました。

以下、ビデオテープに取った子どもたちの発言を、再生できる限りで、再生してみました。そして、子どもたちの発言に対して、私なりのコメントを付けてみました。今後の授業で何らかの役に立ってくれればと思います。

子どもには名前を付けようと思いましたが、アルファベットの方が発言した児童を同定するのに分りやすいと思ったので、アルファベットにしました。

先生:「サンタはいるか」を黒板の右手に板書。(いる)と(いない)とを分類できるように、板書する。(本文最後の写真を参照)

A: サンタって、本物ちゃうって思う。仮装して、プレゼントをもってみんなの中に、インターホンを押して(他の子どもからインターホンじゃないってという発言1)、家の中に入ってくる。

先生:ということは、Aはサンタはいると思っているの、いないと思っているの。

子どもたち: いない<sup>2</sup>。(先生は、(いない)の方に、「にせもの」と板書<sup>3</sup>)

B: サンタにも家がある。サンタは何人もいて、一つの国に一人4。 12 月の、寝てる時にプレゼントをもってきてくれて、クリスマス・ツリーの袋に書いてあるものを入れてくれる。

<sup>1</sup> もしも、この発言を取り上げたら、この発言をした児童は、「煙突から」と答えるであろう。そうすると、この児童は、サンタがいるという前提に立って話していることになろう。このことを押さえたら面白いかもしれない。つまり、A はサンタはいないという前提で話をしているのに、煙突と言った児童は、サンタはいるということになるから。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> この子どもたち発言は、授業の最初ということもあるが、子どもたちが議論に関心を持っていることを示す。A ではなくて、他の子どもが応えたのであるが、先生は、彼らにどうしてそう思う、と聞いてもよかった。

<sup>3 「</sup>にせもの」と板書したところに、発言者の名前を書いてあげると、誰の意見かが後からでも理解できる。

<sup>4</sup> これは面白い発言。どうしてそう思ったか聞いてみるのもいい。

朝起きたらクリスマス・ツリーのところにおいてある5。

(先生は(いる)の方に、「一つの国に一人」と板書)

 $\mathbb{C}$  (男子):僕はサンタさんはいると思う。なぜなら $^{6}$ 、起きたらプレゼントがあったから。

(先生は(いる)の方に、「起きたらプレゼントがあった」と板書)

D (男子): サンタはいると思う。なぜかというと、<mark>誰も起きていないのに7</mark>プレゼントがある。お姉ちゃんが、サンタはいるかなーと言ったら、お父さんがサンタの来る夜にビデオカメラを設置していて、次の日の朝起きるとプレゼントがあって、ビデオを見ると、赤い服着たサンタさんのようなものが映っていたから8。(他の子どもたちから笑い声が起きる。結構興奮している)

E (男子): サンタはいると思う。なぜかというと、寝ているときに、誰も起きていないのに、勝手にプレゼントが置いてあったのはおかしいと思った9。

先生:Dも言っていたね。「もしいないんだったら、・・・」と言っていたね $^{10}$ 。 Eは「もしなければ」と繰り返すが、そこで発言は止まり $^{11}$ 、ボールをBに渡す $^{12}$ 。

(先生は「もし、いないなら~~~」13と黄色のチョークで強調するように板書)

9 E は D の発言に触発されて同じことを言う。

<sup>5</sup> これは、サンタの定義あるいは知識。定義されたものがいるかいないかということがまだ理解できていないようである。

<sup>6</sup> 理由をきちんと述べている。ほとんどの児童が自分の意見を述べた後、「なぜなら」に対応する言葉を用いて、理由を述べている。

<sup>7</sup> C の理由に付け加えて、「誰も起きていないのに」と発言。

<sup>8</sup> ビデオに映っていたという証拠をあげている。

このとき、EはDと発言が同じであることを自覚している場合、僕は、Dと同じ考えだけど、というような発言が、いつ頃から出てくるかに注意。

<sup>10</sup> 先生は、子どもの発言に注目はしたが、それを子どもたちに理解させようとはしていない。

<sup>11 「</sup>もしも~でなければ」という推論の形は理解していないのかもしれない。

<sup>12</sup> かなりの児童が、誰にボールを渡すか考えたり、手を挙げている子を見たりして、時間をとっている。一度、どういうふうにボールを手渡したらいいか聞いてみると、一つのルールができると考えられる。子どもたちはいろいろ配慮している様子。

<sup>13</sup> 先生は、論理的な発言の仕方に注目させようとしている。

B: みんなに<mark>質問したいんやけど<sup>14</sup>、マンションやと、</mark>煙突から降りるって聞いたんだけど、マンションやと、鍵がかかっていて入れへん。

子どもたち:でもさー、とかいろいろ言いたいことがある様子15。

(先生: どうやって入るの? と黄色のチョークで(いる)の下に板書

 $\mathbf{F}$  (女子): 私は、サンタさんはいないと思う。(「えー」というびっくりの言葉が続く。誰かがサンタさんは幽霊やでと発言。これは、後で  $\mathbf{D}$  と分る)  $\mathbf{D}$  さんはプレゼントがあったと言っているけど $\mathbf{16}$ 、お父さんとお母さんは起きてプレゼントをしたりしているんだと思う。

(先生:(いない)の方に、お父さんとお母さんがプレゼントと板書)

(たくさんの子が手を挙げ、「まだあたってない」と発言する子がたくさんいる)

G (女子): サンタさんはいると思う。なぜなら、<mark>もしサンタさんがいなかったらプレゼン</mark>トはもらえないし、売ってないプレゼントとかがあるから17、サンタさんはいると思う。18

H (男子): あの、僕はサンタさんがいると思う。なぜかというと、前、サンタさんに頼んだら、**服にサンタさんの顔が描いてあった**<sup>19</sup>。サンタさんの下にメリークリスマスと書いてあった。

何人かの子が自分にも書いてあったと発言20。

20 子どもに、同じ経験をしたことのある人は、と尋ねてもいい。

<sup>14</sup> この質問を教師が取り上げてみたら、あとで見るような議論の流れすぐに出たかもしれない。子どもたちは、次に見るように「でもさー」とか何か言いたそうにしていた。

<sup>15</sup> 結局この質問に対する応答はなく、F の発言が続く。後で、この質問を受けて発言する子が出てくる。

<sup>&</sup>lt;sup>16</sup> D の発言を受けて自分の意見を言っている。その間の発言には、直接応えてはいない。 反論を述べている。

<sup>17</sup> プレゼントをもらっても、サンタからではないかもしれないという考えが隠れている。

<sup>18</sup> ここで、この子が、はっきりと「もしサンタさんがいなければ」という発言をする。

 $<sup>\</sup>sim$ P $\supset$  $\sim$ Q $, Q_{\circ} ::$ P

<sup>19</sup> 証拠を挙げている。

I(女子): サンタさんはいると思う。だって、サンタさんがいなかったらクリスマスという 日もない<sup>21</sup>と思うし、前のクリスマスの日、お母さんにおくってもらってサンタさんを見た <sup>22</sup>から、サンタさんはいると思う。(このとき、他の子が「見た?」と発言すると、Iは頷い た)

別の子が<mark>「D さんと一緒や」</mark>と発言<sup>23</sup>。

(先生は、<u>もし、いないなら~~</u>の項目に、子どもの「起きたらプレゼント」や「クリスマス」についての発言を書き込んでいる。板書図を参照。)

J(女子):いると思う。<mark>毎年お菓子とかをあげていて、朝起きたら無くなっていたから<sup>24</sup>。お父さんかお母さんかなと思ったけど<sup>25</sup>、お母さんから、違う、そんな遅くまで起きてへんと言われて、じゃいるんだなと思った。</mark>

(ここまで、10分10秒経過)

K(男子):僕はいると思う。いなかったらプレゼントも何もこーへんやん。

D:お父さんとかが言ってたんだけど、<mark>サンタさんは幽霊26やから</mark>、鍵閉まってても入れる<sup>27</sup>とか。幽霊だから、浮かべる。幽霊だから、(他の子がうるさくて、しばらく黙っている)。 死んだ人だからって言ってた。

(先生はどうやって入るのという問いへの回答として、この「ゆうれい?」という言葉と 後の「まほう?」という板書していく。板書図を参照)

25 これは、Fへの反論か。

 $<sup>^{21}</sup>$  これも、 $\sim P \supset \sim Q$ 、Q。  $\therefore P$  という推論を使っている。

<sup>22 「</sup>見た」という証拠を挙げている

 $<sup>^{23}</sup>$  この発言をした子を当てて、「どうして一緒と思う」という問いかけをすることができる。 I も D も理由を言っているということで、一緒と言ったのであろう。

<sup>24</sup> 証拠を挙げている。

<sup>26</sup> これは全く新しい発想。ただ、幽霊はいるのかという問題となっていく(子どもたちは次回のP4Cでは「幽霊はいるか」でやりたいと言ってきたという。もう一度幽霊が話題になることもあり、子どもたちはこのテーマに興味を持ったようである。)

<sup>27</sup> 鍵に関する発言は、先の B の質問への回答となっている。

(少しうるさいので、次のLはしばらく黙っている。静かになった後発言)

L (男子): サンタはいると思う。だって、図鑑で見た<sup>28</sup>とき、サンタさんは北か南かは忘れたけど、そこに住んで、子どもが書いた手紙がサンタのところに集まってきているって図鑑には書いてあったし、あと、幼稚園の友達から聞いたけど、サンタみたいな人が赤い服を着てソリみたいなものに乗ってたのを先生が、見たと言っていたとか。

(先生は、だから)と黄色の字で黒板に書き込み、この項目の元に、「カメラ」「図鑑」「ラベルがあった」「おかしが無くなってる」という子どもの発言を入れていく)

M (男子): いると思う。紙を置いていたら、<mark>朝起きたら書いてあった<sup>29</sup> (発言が分らない</mark> 他の子からは、<mark>何、何て?という質問が出る<sup>30</sup>)</mark>

N (男子): (何を言っているか分らない。先生は分っていたみたい31)

O(女子): サンタさんはいると思う。なぜかというと、6 時半くらいに起きて、見たら、ママに、サンタさんているのって聞いたら、うんと言われて、それで、ママにプレゼントがあるって聞いてるって言って、いつも冬になったら寒いから、ジャンバーみたいな服を、それで、寝るときに置いてたら、その下に隠してあった32。

(隣の男子が何か怖くなってきたという33)

(15分30秒経過)

 $P(\mathcal{L})$ : さっき B さんが、サンタさんがマンションとかにどうやって入っているのかっ

<sup>28</sup> 図鑑に書いてあるという別の証拠。たゞ図鑑に書いてあるからサンタはいるかという疑問はもっていない。幼稚園の先生の発言。これは、単なる知識。まだ、子どもには知識と存在との違いに対する反省は生まれていない。

<sup>29</sup> この子も、かなり前の H の発言に勇気づけられてこの発言をしたように見える。

<sup>30</sup> このような場合は、先生は「M さんの言っていることがよく分らない人がいるみたいだね、もう一度言ってくれる」と介入する。

<sup>31</sup> ここも上と同じような状況。先生はみんなに分るようにもっていく。

 $<sup>^{32}</sup>$   $^{0}$  はゆっくりと自分の考えをまとめながら発言している。周りの子は  $^{0}$  の発言を促しているような素振りを見せる。

<sup>33</sup> 〇の発言と隣の子の反応の状況がよく分らない。

<mark>て聞いたけど<sup>34</sup>、多分サンタさんは</mark>魔法を使っているんだと思う<sup>35</sup>。(ここで、先生は「まほう?」という言葉を板書) サンタはいると思う。サンタさんがいなかったら、箱にメリークリスマスと書いてあるものがあって、<mark>お母さんがあとで開けて入れたのなら、もう元に</mark>戻すことはできないと思う<sup>36</sup>。だからサンタさんはいる。

先生は P の「だから」という発言を受けて、だからと黄色のチョークで板書し、この項目の元に、子どもたちが理由として挙げていた「カメラ」「図鑑」、そしてその後の「ラベルがあった」「おかしが無くなってる」という発言をくくるようにする。

Q (男子):煙突も(ないし)、鍵も開いてない家にどうやってサンタは入るの $^{37}$ 。

先生:(Qに対して、)いると思うの、どっち?38

Q:サンタはいると思う。

先生:いると思うけど、どうやってサンタが入るか<mark>分らない?<sup>39</sup>。</mark>

R(女子): サンタさんはいると思う。だって、24日にサンタさんの神40が来て、それで・・・。 サンタさんは遠くにいるので、聞こえていないと思うけど、何で心が読めるの41。

S(女子): 私はサンタさんがいると思う。だって、サンタさんがいなければ、プレゼント

41 どうして心が読めるかという別の質問を出す。

 $<sup>^{34}</sup>$  B の発言に対する応答。これもかなり後になってから。また、F の意見に対して、メリークリスマスと書いてあるメッセージの入った箱は空けられた形跡がないということで反論。

<sup>35</sup> 魔法を使うという指摘。これをどう受け止めるか。D はサンタが幽霊だと言った。

<sup>36</sup> Pはサンタはいるに対するまた別の理由を言う。

 $<sup>^{37}</sup>$  Q は D や P の発言を聞いているにもかかわらず、改めて、この質問をしている。自分で納得しようとしている態度が見える。教師は Q に D や P の発言では納得いかないのか、聞いてみても面白い。

<sup>38</sup> なぜこの質問をしたのか。家に入れないのだからサンタはいないと考えているか、それとも、単純にこの質問を出していると考えたのか。

 $<sup>^{39}</sup>$  Q に確認を取ったのか。ここは、先生は最初の問いが「サンタはいるか」ということであったので、それに対する Q の考えを聞いた。本来の問いに帰ることは大切だが、ここはこの問いを繰り返す必要はなかったのでは。

<sup>40</sup> サンタは神であると考えている。

## <mark>がないから42</mark>。

F: (先生とのやり取りがすこしあって、この子はいないという意見だと主張): サンタさんがいなければ、プレゼントがないと言ったけど、サンタさんがいたとしても、-つの国に-人だったら、お金が無くなっちゃう $^{43}$ 。

Fの意見に子どもたちは結構反応している。

先生: <mark>おもしろいなー44</mark>。(そう言いつつ、黒板の(いない)の方に「お金がないと思う」と書いて、「一つの国に一人」と板書してある文句と結びつける。

Fは誰にボールを渡そうか考えて、結局 Sに投げ返した45。

S:F さんは言っていたけど、サンタさんは一つの国に一人でも、お金持ちだから。(笑う)

(かなりの子がいろいろ言いたい状況となった)

T (女子): <u>私は、サンタさんはいると思う46</u>。<mark>J と同じだけど47</mark>、コーヒーを置いておいたら、コーヒーを飲んでて、お菓子も半分くらい残っていた。

(先生はだからの項目に、「おかしが無くなってる」と板書)

(21 分 4 秒経過)

\_

<sup>42</sup> これはすでに多くの子が言っている意見であるが、同じであっても、自分の考えとして 伝えたい。

<sup>43</sup> 自分は、サンタはいないと思うが、仮にいるとしてもとして、Bの意見を批判。

<sup>44</sup> 何故面白いと思ったのか、これは先生の評価なので子どもにわかるようにする。先生は、 Fが自分の反対意見にこだわっていること、推論の仕方が優れていること、話を新たな視点 で展開できるようにしたこと、という点で面白いと伝えると、子どもたちはこのような発 言の仕方が評価されるのかということを理解していく。

<sup>45</sup> ここで初めて、直接の議論が展開。

<sup>46</sup> 議論は続かず、また、サンタはいるかいないか、に戻った。

 $<sup>^{47}</sup>$  ここで、初めて他の子どもの意見と同じであるという発言が出た。それもかなり前の ${f J}$  の発言と同じ証拠を挙げている。

G: D さんは、サンタさんは幽霊だと言っていたけど<sup>48</sup>、幽霊ではないと思う。だって、サンタさんは洋服を着ていて、幽霊やったら洋服は着ていない<sup>49</sup>と思う。

### G は D にボールを渡す50。

D: 幽霊でも普通は服は着れると思う。あと、誰かが言っていたと思うけど、お金が無くなると言ってたけど、サンタは幽霊だから<sup>51</sup>、お金は天国から、何か、天国から、売っているおもちゃを透明にしてあがってくんねん。これは、予想。

P:F さんの質問の答えは、多分、F はそう言っているけど<sup>52</sup>、何か、全部魔法でできているんだと思う。(えーっという多くの子の反応。先生は「ゆうれい?」の横に「まほう?」と板書) もう一個質問があんの。そりはトナカイが押しているって言われているけど、トナカイはどうやって飛んでるの<sup>53</sup>。

B: <mark>お金がないって言っていたけど<sup>54</sup>、お金ではなくて、サンタたちは紙を取り出して、それを機械に入れると、欲しがっているプレゼントが勝手に出てくる<sup>55</sup>。</mark>

(それは、怪傑ゾロに出てくるで、という発言があると、B は笑っている)

U(男子): サンタたちは<mark>お金がないって言っていたけど<sup>56</sup>、サンタが自分で作っているの。</mark> (ここで他の子から「えー、自分で作ってるん」という質問が出て) うん。

51 自分の主張にこだわって、さらに、別の意見の回答を出している。自分の意見は空想 (予想) という自覚がある。

<sup>48</sup> かなり前の、D の発言に反論をしている。サンタの定義で論争する。

<sup>&</sup>lt;sup>49</sup> ここも、~P⊃~Q、Q。∴Pという推論式を使っている。

<sup>50</sup> ここでも議論の展開がなされた。

<sup>52</sup> **F**のどんな発言を受けて、「そう言っているけど」と言ったのか。これは、恐らく、お金が足りないという **F**の発言に対する反論であろう。

<sup>53</sup> 誰に対する質問か。なぜ、この質問を出すのか。「全部魔法でできている」と言いつつ、 素直な質問も持っている。

 $<sup>^{54}</sup>$  これも、お金についての  $^{\mathbf{F}}$  の発言に対する応答。 $^{\mathbf{B}}$  は  $^{\mathbf{P}}$  がやはり、 $^{\mathbf{F}}$  のお金についての質問であると理解しているのか。

<sup>55</sup> ここまでくると、幽霊や魔法という言葉を受けて、かなり空想的な発言になってくる。

<sup>56</sup> お金のことで、5人の児童が議論を続けた。

L: トナカイは、家の屋根から違う家の屋根に飛び移って、それをいっぱい繰り返して、プレゼントを持ってくる<sup>57</sup>。プレゼントをどうして入れるか分らへんけど。

V:(女子): サンタはいると思う。だって、12 月にママからプレゼント買ってもらって、 そっから、24 日夜寝て、朝、25 日朝起きたら、プレゼント置いてあって、(他の子から「えっ」という声) だからサンタさんはいると思う $^{58}$ 。

子どもたちから先生に聞いてみたい、という発言。

先生はこれを聞き流す。Fがいないという発言を続けたことにみんなの拍手を求める。

また、先生はどう思うのという質問があるが、先生はと言いつつも、結局答えないで<sup>59</sup>、子どもたちの自己評価へと進んでしまう。

\_\_\_\_\_

## 評価。

自己評価では、「深く自分で考えることができた」、「他の人の意見を聞けた」「話し合いを楽しむことができた」という 3 つの評価項目があり、評価には「かなり」「マーマー」「あまり~でない」がある。

児童は「かなり」の場合は、腕を出して手を握り、親指を上に向け、「マーマー」では親指 を水平に出し、「あまり~でない」では親指を下に向けるという動作をする。

#### 今回の授業では、

「深く自分で考えることができたなー」かなりの子ができた。

「他の人の意見を聞けた人」 マーマーという回答が多い。これは、やはり、発言している子の話に熱心に耳を傾けるというよりも、話を聞いて自分の考えを手を挙げて言うのではなく、隣の子と話したり、自分勝手に何か言ったりする場面が見られたからである。子どもはこのことを自覚している。教師は、発言に対して、私語が多く出たら、その私語を

<sup>57</sup> これは、P の発言に対しての回答。

<sup>58</sup> やはり、自分の考えを述べるという態度。お母さんのプレゼントとサンタのプレゼントは一緒なのか。一緒だとすると、お母さんがサンタとなるが (?)、このことをずっと考え続けて、発言するということ自体すごい。

<sup>59</sup> やはり、先生はこう思う、と述べた方がいいと思う。その際、先生の回答が権威を持つようなものとならないように注意。実際、この授業の先生が回答しなかったのは、この恐れを感じていたからであろう。

語っている児童に対して、今の発言に対して何か意見がある、とか、私語の内容がわかった時には、その子を指名して、どうしてそう思うのと質問することが、議論の深まりを生む。

「話し合いを楽しむことができた人」 ほとんどの子が楽しんだ。

#### 子どもの参加度。

発言は32人のクラスで、男子12名、女子10名、合計22名の子どもが発言した。複数回発言した子どももいたが、発言者が偏るということはなかった。教師があまり介入せず、子どもの発言をそのまま受け止めていたことによると考えられる。

#### 議論の特徴。

子どもたちの議論では、誰かが自分の意見を言って、次にその意見を受けて議論が進むという形態はとっていない。特に、ある児童が質問をしても、次に発言する児童はほとんど、その質問を無視して、自分の意見を表明している。しかし、何人かが発言した後、質問をした児童の質問に答えるという形態を取ったり、かなり前の発言に対して、自分の意見を述べるという進行になっていたのは、大変興味深い。

この議論を受けて、次に「幽霊はいるか」をテーマに議論しようと子どもたちが提案してきたのは、子どもたちが P4C を楽しんでいる証左であろう。

子どもたちの発言は、教師に向かってなされるというよりも、自分の考えを他の子どもたちに表明しているという場面の方が多い。



板書には発言者の名前を書いてあげるのがいいだろう。誰の意見かがわかる。 また、いつか時間を取って、どうやって入るの?、もし、いないなら~~~、だから、 つけたしということを黄色字で四角で囲んだ理由を説明してあげると、今後の子供たちの対話が豊かになると思われる。

文責: 桝形 公也